

令和2(2020)年度

日本特別活動学会 第7回 実践事例募集事業

推 奨 実 践 事 例

事例番号 7-1

学級活動(1)における思考力・判断力・表現力等の育成

— ルーブリック評価の作成と内容の吟味活動を通して —

(新潟県)新発田市立加治川小学校

本宮 佑二郎(トミヤ ユジロウ)

実践テーマ	学級活動(1)における思考力・判断力・表現力等の育成 —ルーブリック評価の作成と内容の吟味活動を通して—
実践区分 ○囲み	学級活動・ホームルーム活動 児童会・生徒会活動 クラブ活動 学校行事 その他(具体的に、)
実践事例の 背景、ねらい、 意義など	特別活動における思考力・判断力・表現力等を育てるための指導の工夫について、杉田(2017)は、学習過程ごとに以下のように示している。 ・「出し合う」⇒自分の考えを根拠や理由を分かりやすく表現すること。 ・「比べ合う」⇒多様な意見の共通点や相違点を共感的に理解し、建設的に考え、質問や意見などを表現すること。 ・「まとめる」⇒条件付きの賛成や折衷案などの折り合うための考え方、「文殊の知恵」のような生産的な考え方をすることや相手の立場を考慮した表現をすること。 筆者は、これらの指導の視点を参考にし、学級会のめあてを設定したり、学級会の助言を行ったりしてきた。しかし、具体的にどのような姿で話し合いに参加すればよいのか、指導者と児童との間で共通理解が足りていないことを感じた。また、児童一人一人に、合意形成の過程でどのように学級会に参加したかを意識させることができず、学級会の過程で児童がどのような話し合いの力を身につけたかを自覚する手立てが不十分であった。 そこで本実践では、杉田(2017)が示した指導の視点を参考に学級活動(1)におけるルーブリック評価を児童と相談しながら作成した。また、実践の途中で内容の妥当性を吟味する活動を取り入れることで、児童が主体的に学級活動(1)における思考力・判断力・表現力等を意識することができると思った。
実践の時期	令和 2年 4月 から 令和 3年 3月

1 実践の内容と検証方法

(1) 内容

第5学年23名の学級で、4月から3月の計13回の学級会の実践である。第1回学級会を行った後、児童と共に学級会のルーブリック作りを行い、毎回の学級会の振り返りに活用した。「出し合う」、「比べ合う」、「まとめる」の視点は教師側から提示し、第1回目の学級会における話合いの姿を振り返った。多くの児童が自分の姿だと感じる項目をB基準にし、よりよい話合いの姿について考えを出し合い、A基準を作成した。

4月作成したルーブリックは以下の通りである。

	A	B	C
発信力 (出し合う)	理由とともに自分の考えを伝えることができた。	自分の考えを伝えることができた。	事前に自分の意見をもつことができた。
友だち尊重力 (比べ合う)	友だちの考えを自分の考えと比べながら聞くことができた。	うなずいたり、あいづちを打ったりして話を聞くことができた。	友だちの方向を見て話を聞くことができた。
考えまとめ力 (まとめる)	多くの人が納得できるようなまとめ方を考えた。	すぐに多数決をとらず考えをまとめた。	多数決をして考えをまとめた。

4月作成のルーブリックを活用し、第2回学級会から第7回学級会の計6回、学級会の振り返りをした。10月中旬、国語科「よりよい学校生活のために」という単元において、話合い活動について学び、ルーブリックの評価内容を見直す授業を実践した。その結果、3つの視点全てにおいて、発展的な内容であるS基準が作られた。10月中旬に改変したルーブリックは以下の通りである。

	S	A	B	C
発信力 (出し合う)	友だちの考えに質問したり、付け加えて意見したりすることができた。	理由や根拠とともに自分の考えを伝えることができた。	自分の考えを伝えることができた。	事前に自分の意見をもつことができた。
友だち尊重力 (比べ合う)	少数意見や自分とちがう考えを聞いて話合いに生かすことができた。	友だちの考えを自分の考えと比べながら聞くことができた。	うなずいたり、あいづちを打ったりして話を聞くことができた。	友だちの方向を見て話を聞くことができた。
考えまとめ力 (まとめる)	みんなが納得できるようなまとめ方を最後まで考えた。	多くの人が納得できるようなまとめ方を考えた。	すぐに多数決をとらず考えをまとめた。	多数決をして考えをまとめた。

改変したルーブリックは、第8回学級会から第13回学級会の計6回、振り返りに活用した。

(2) 検証方法

2つの方法で実践の成果と課題を検証する。1つ目は、ルーブリック評価の結果である。第2回、7回、8回、13回の4つ結果を比較し、児童の変容を考察する。2つ目は、第13回学級会における「まとめる」場面の様子から児童の変容を考察する。

2 実践の結果と考察

(1) ルーブリック評価の結果から

表1・2・3の結果から、「出し合う」、「比べ合う」、「まとめる」の全ての視点において、よりよい評価へと人数が増加したことが分かる。表にはまとめられていない第3回から第6回、第9回から第13回においても上下の変動がありつつも、少しずつよりよい自己評価をする児童が増えていった。

第1回から第7回まで、学級会の話合いのめあては、教師側から提案していたが、評価内容を見直し、S基準を設定した第8回以降からは、計画委員会の児童が主体的になって話合いのめあてを提案するようになった。計画委員会では、『前回の学級会では、「まとめる」の場面でもう少し全員の考えを聞くべきだった。』などという内容が話し合われるようになり、学級会の各過程での大切にしたいことを教師側と共通理解できていたと考えられる。

(2) 第13回学級会の様子から

第13回の議題は、「5年生ありがとうの会を開こう」であり、1年間の友だちへの感謝の気持ちを感じながら協力できる集会活動をしたいという願いから提案された。この学級会の「まとめる」場面において、A児の発言をきっかけとし、少数意見を生かすような合意形成が見られた。比べ合う

話合いでは、各意見の心配な点を考え、その解決策について話し合った。その過程を経て、投票を行った後の場面である。ドッジボールを選んでいる4人は、フリスビーを投げるのが苦手であり、ドッジボールを

【表1 「出し合う」の結果（単位：人）】

	第2回	第7回	第8回	第13回
S評価	0	0	4	8
A評価	6	12	11	12
B評価	14	10	6	3
C評価	3	1	2	0

【表2 「比べ合う」の結果（単位：人）】

	第2回	第7回	第8回	第13回
S評価	0	0	3	8
A評価	10	11	11	12
B評価	7	10	7	3
C評価	6	2	2	0

【表3 「まとめる」の結果（単位：人）】

	第2回	第7回	第8回	第13回
S評価	0	0	7	6
A評価	7	10	10	11
B評価	13	10	6	6
C評価	3	3	0	0

【※学級会の様子（一部抜粋）】

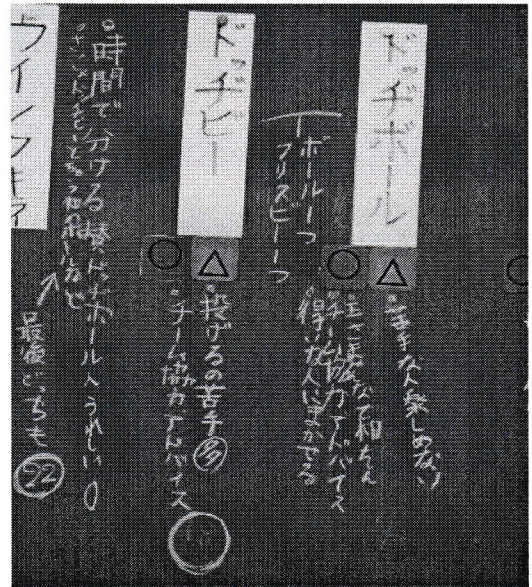
司会：多数決で、ドッジボール4人、ドッチビー18人と決定しましたが・・・。

A児：ドッチビーで使うボール、フリスビーは時間差で決めるとよい。

B児：ドッチボールを選んだ人も楽しめるように時間で分けるのは賛成です。

したいと考えていた。しかし、運動が苦手な人にとってはドッジビーの方がより楽しめるのではないかという考えが発表され、多くの児童がその考えに共感していた。そのような場面でA児がした提案は、ループリックの「まとめる」のS評価である「みんなが納得できるようなまとめ方を最後まで考えた」姿であると言える。A児の提案がされた後、A児の提案を後押しするようなB児たちの意見が出され、2つの遊びを時間差で分けてどちらも行うということで話し合いがまとまった。A児は、第12回までのループリック自己評価では、「まとめる」の項目をA評価にしていたが、この第13回の自己評価ではS評価としていた。このA児の自己評価は、教師側の評価と合致しており、A児が話し合いの「まとめる」話し合いでの成長を実感できた場面であったのではないかと考える。

〔写真 「まとめる」話し合いの板書〕



3 成果と課題

成果として挙げられるのは2点である。これまで筆者が行ってきた話し合い活動における児童の振り返りでは、「4：よくできた」、「3：まあまあできた」、「2：あまりできなかった」、「1：できなかった」という基準で各項目を児童が自己評価することがほとんどであった。このような評価方法では、児童一人一人に基準があり、目指す姿が不明確であった。また、教師と児童の間でも目指す姿を共通理解することができないという課題があった。しかし、児童の「こんな話し合いができるようになりたい。」という願いを聞きつつ、目標の姿を具体的に定めるループリック評価を取り入れることで、上記のような課題を克服することができた。また、ループリック評価を繰り返し行うことと、評価内容を見直す活動を取り入れることで、学級会の話し合いにおいて、子どもたちが自らの立ち位置を自覚し、より高い次元へ思考力・判断力・表現力を高めようとすることが示唆された。

今後の課題として、本実践は自学級のみでの実践であった。ループリック評価は、学校における特別活動の目標に応じて、全校の取組として各学年で系統性のあるもののできればより有効な取組になるのではないかと考える。

参考文献

杉田洋『小学校 新学習指導要領の展開 特別活動編』明治図書、2017年